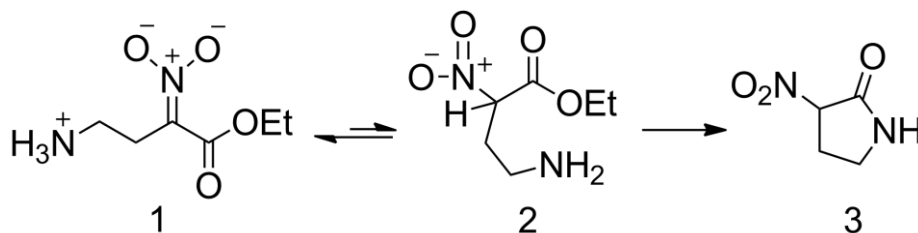


中員環および大員環化合物は生理活性物質などにしばしば見られる重要な骨格であるが、その合成は分子内閉環と分子間反応が競争的に進行するために効率が極めて低いことが多い。そこで本研究では、擬似分子内反応の高効率性という特長を活かして環骨格を構築することを計画した。すなわち、分子内塩 **1** を基質に用いれば平衡によってアミノ基が遊離した際、反応点であるカルボニル基と空間的に近い状態 **2** (intimate pair) になる。その結果、反応が容易に進行し、骨格 **3** の構築が可能になると考えた。



本研究ではその計画に基づいて基質 **1** の合成の検討を行なった。またその過程で単離した生成物の構造決定についても併せて検討を行なった。